



## 震災復興から新たな日常へ



—防災まちづくり大賞表彰式の様子—

### contents

#### 特集 P2-3

「中越防災安全推進機構 新体制スタート」  
平成 27 年 4 月より機構の体制が新しく変わりました

【シリーズ 人】 P7 長岡市川口 内藤 和明さん  
【シリーズ 4コマまんが やまこしの四季】 P8 「山古志の春」  
【その他】 P8 インフォメーション、施設のご案内、会員募集

#### シリーズ 防災教育の現場から P4-5

「そなえ館での防災教育支援実践例」  
おぢや震災ミュージアムそなえ館×小千谷市立小千谷小学校

# 特集 中越防災安全推進機構新体制スタート

平成 27 年 4 月 1 日より、

当機構の体制が新しく変わりました。

今号では、変更点をお知らせするとともに  
機構の事業内容を改めてご紹介します。

## 本部事務局

事務局長 諸橋和行  
事務局次長 玉木賢治  
チーフデザイナー 赤塚雅之  
事務局員 中村美由紀

## ムラビト・デザイン センター

センター長 阿部巧  
チーフデザイナー 金子知也  
コーディネーター 日野正基  
  
チーフデザイナー 石塚直樹  
(せんだい・みやぎ  
NPO センター出向)

## 震災アーカイブス・ メモリアルセンター

センター長 稲垣文彦  
(柏崎震災アーカイブセンター長兼任)

## 地域防災力センター

センター長 河内毅  
チーフデザイナー 関谷央子  
コーディネーター 井上賢太郎  
事務員 布川千春

### 長岡震災 アーカイブセンター きおくみらい

館長 澤田雅浩

マネージャー 山崎麻里子  
コーディネーター 松井千明  
スタッフ 高田千枝

公益社団法人  
中越防災安全推進機構の  
スタッフが働いています！

### おぢや 震災ミュージアム そなえ館

館長 丸山久一

マネージャー 松本勝男  
プログラマー 細貝悠斗  
プログラマー 和田恵子  
プログラマー 高野真弓

一般財団法人  
小千谷産業開発センターの  
スタッフが働いています！

### やまごし復興交流館 おらたる

館長 木村拓郎

スタッフ 川上沙織  
スタッフ 畔上凌  
スタッフ 坂牧美津枝  
スタッフ 関将慶

NPO 法人  
中越防災フロンティアの  
スタッフが働いています！

### 川口きずな館

館長 上村靖司

チーフデザイナー 中林道泰  
コーディネーター 赤塚千明  
コーディネーター 星野桂子  
コーディネーター 中村充

NPO 法人  
くらしサポート越後川口の  
スタッフが働いています！

### 柏崎震災 アーカイブセンター (仮称)

センター長 稲垣文彦

マネージャー 筑波匡介

中越沖地震のメモリアル  
平成 27 年 1 月柏崎市に  
オープン予定です！

## 機構新体制について

新潟県中越大地震から十年が経過し、  
当機構も新しい局面を迎えています。そ  
こで、新年度に際して、今後の組織のあ  
り方を見据えた上で、当機構の体制を上  
図のように改編しました。

主な変更点が三つあります。

一点目は、新潟県中越沖地震の経験と  
教訓を伝える施設として、「柏崎震災アー  
カイブセンター(仮称)」が加わったこと。  
平成二十七年十一月に柏崎市にオープン  
する予定であり、こちらの管理・運営も  
当機構が担っていきます。

二点目は、現在運営している中越メモ  
リアル回廊の四施設(「きおくみらい」「そ  
なえ館」「おらたる」「きずな館」)にこ  
の柏崎震災アーカイブセンターを含め、  
新しいセクションとして「震災アーカイ  
ブス・メモリアルセンター」を設置した  
ことです。今後は各館の個々の魅力向上  
はもちろんのこと、総合力を発揮するよ  
うな事業展開を積極的に仕掛けていきま  
す。

三点目は、これまでの「復興デザイン  
センター」を改め、「ムラビト・デザイ  
ンセンター」を設置したこと。中越大震  
災で被災した中山間地域の復興や地域づ  
くり人材の確保・育成に取り組むととも  
に、その経験を活かした全国各地の人材

育成・支援なども行っていきます。

人事についても全体的に世代交代を行  
いました。事務局長、震災アーカイブ・  
メモリアルセンター長、地域防災力セン  
ター長、ムラビト・デザインセンター長  
がそれぞれ新任(交代)となっており、  
震災十年以降の新たなスタートラインに  
立って走り始めたところです。

現在、様々な業種・分野でイノベーション  
が求められています。新潟県中越大震  
災復興基金を主たる活動資金としている  
当機構も同様です。今回の組織改編に際  
して、イノベーションとは、従前からの  
業務を意欲ある若い世代に任せ、存分に  
活躍してもらうことで得られる必然的な  
結果だと確信することができました。こ  
れまでとは異なる発想や着眼からユニ  
ークな動きが生まれています。

「震災復興から新たな日常へ」。中越大  
震災の経験を基軸としながら、「中越」  
から新しい動き(価値)を創り出し、地  
域内外に向けてアクションを起こし続け  
ることで、様々な主体にとって「なくて  
はならない組織」でありたいと思います。  
今後の新制・公益社団法人中越防災安  
全推進機構の活動にご期待ください。

(事務局長 諸橋和行)

## 地域防災力センター

### ◆センターの主な取り組み

- 地域防災力向上事業
  - ・長岡市防災アドバイザー派遣
  - ・新潟市防災事業  
(避難所運営 WS、津波避難マップ活用事業)
  - ・自治体向け研修講座
  - ・その他県内外の防災事業
- 防災教育事業
  - ・ふるさと新潟防災教育推進事業  
(学校実践事業、学校サポート事業)
  - ・新潟県防災教育プログラム制作事業(原子力災害編)
  - ・長岡市親子防災教室等運営業務
- 人材育成仕組みづくり
  - ・中越市民防災安全大学、まちなか大学・大学院
- 防災ネットワークづくり
  - ・全国、県内、長岡市内 ほか
- 災害対応
  - ・災害ボランティアセンター運営 等

### ◆ひとこと

地域防災力センターは、地域防災力を高めるための多彩な活動を展開しています。今後は、活動をより広く展開していくため、各種講座で講師を担える人材や、学校と地域をつなぐコーディネーターの育成などを視野に入れた、人材育成の仕組みづくりやツール開発などにも力を入れていく所存です。今後とも、当センター業務へのご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



## ムラビト・デザインセンター

### ◆センターの主な取り組み

- 外部人材育成
  - ・インターンシッププログラム
  - ・首都圏プラットフォーム  
(各種 PR、体験ツアー企画、マッチングイベント、新規事業 開発、コミュニティ形成等)
- 地域支援人材育成
  - ・オープンセミナー
  - ・地域復興支援員研究会
- 地域内人材育成
  - ・実践研究(女性、農村起業、人的支援、東日本大震災、野生動物、森林資源、農業経営、エネルギー、空き家)
  - ・新潟県内の連携推進

### ◆ひとこと

ムラビト・デザインセンターは、中越地震からの復興を支援する中間支援組織として、被災した中山間地での復興や地域づくりに関わる人材確保・育成に取り組んで来ました。また、その経験を活かして、全国の中山間地域における人材育成や、東日本大震災被災地の復興人材の育成・支援なども行っています。

地域外からのインターン生など、地域に新しい視点をもたらす「外部人材」と地域復興支援員などの地域活動をサポートする「地域支援人材」、そして地域の担い手である「地域内人材」と連携しながら震災復興を越えた活気ある「新しい中越の日常」を目指します。



## 震災アーカイブス・メモリアルセンター

### 長岡震災アーカイブセンター きおくみらい



### 主な取り組み

- ①中越メモリアル回廊の見学コーディネート
- ②次世代防災学習支援拠点
- ③資料収集・整理とネットワークづくり

### ひとこと

回廊を巡る前の情報収集の場として、学習・発表の場として是非ご利用ください!

### おぢや震災ミュージアム そなえ館



### 主な取り組み

- ①中越大震災時にいただいた支援への恩返し
- ②地域防災力向上支援・次世代防災学習支援
- ③地域と連携した被災地支援・防災グリーンツーリズム支援
- ④子ども向けイベント「防災そなえチャレンジ」通年開催

### ひとこと

さあ、楽しく学んでそ・な・えましょ!

### 川口きずな館



### 主な取り組み

- ①料理教室、お茶会などきずな館主催・地域住民の持込イベント実施
- ②震災支援商品販売、きずなカフェ
- ③川口運動公園施設受付

### ひとこと

震災をバネに立ち上がった、川口をめぐる住民のストーリーを体感しに。越後三山の四季を眺めに、おいしいコーヒーを飲みに。その人その人によって、様々な楽しんでいただける「川口きずな館」です。川口にお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。

### やまこし復興交流館 おらたる



### 主な取り組み

- ①地域の魅力発信
- ②震災の記憶の伝達

### ひとこと

おらたるで山古志のことを知って、地域へお出かけください!

平成 25 年度末に完成し、新潟県下の小中学校および関係機関に配布された「新潟県防災教育プログラム」。これをきっかけに、学校教育現場での防災教育の取組みが定着し、継続して実施されるよう、学校や地域の実状に合わせた「自校化」に焦点を当て、県内の小中学校での先進的な取組み事例を、シリーズ「防災教育の現場から」として当機関紙で毎号紹介していく。

1	12	11	10	9	7	5	4	月	▼学習の流れ
27	10	12 11 5	22 15	8		8 1		日	内容
総合学習発表会を見学	そなえ館スタッフが一組出前授業	三組・四組、地元語り部さんを派遣、講話を実施（各三回）	そなえ館スタッフが五組出前授業（二回）	担任教諭が改めてそなえ館に来館、今後の総合学習での防災教育支援の依頼があった。	各クラスで調べ学習、体験活動を実施	小千谷市役所の危機管理課の方から講話	小千谷小学校五年五クラスが二日間にわたりクラス単位でそなえ館来館。スタッフの解説で館内を見学、地震の疑似体験を行う。		児童が中越地震について知っていることをマインドマップに広げる

今回防災教育支援を行った小千谷市立小千谷小学校は、明治元年開校と全国で一番歴史がある公立学校である。また、児童数は市内八つの小学校の中で最も児童が多く、九〇二名（平成二十六年五月当時）と市内の全児童数の半分を占める。五年生は、震災から十年を迎えるこの特別な年に総合学習の時間で防災学習に取り組んだ。学習のテーマは「中越地震から十年〜今、私たちにできること〜」。児童たちは本やインターネット、家族からの聞き取りなどをおこない、一年間通して防災学習を実施、その成果をまとめた発表会をおこなった。

震災当時、〇〜一歳で当時を覚えている児童は皆無だ。五月初旬におぢや震災ミュージアム「そなえ館」を五年生五クラスが徒歩で訪問。施設近隣の児童は週末や夏休みなどに多く来館しているが、館内をそなえ館スタッフが説明しながら本格的に見学するのは初めて。被害状況や被災マンシヨンの再現展示、避難生活の様子などを写真や説明を聞きながら見学、多くの児童が被害の大きさに驚いていた。十年前、自分たちが住んでいる地域で起こったことを知り、災害は身近なものであることを感じてくれたと思われる。

「そなえ館」見学の感想（抜粋）

- ・地震が起きたころ私は〇歳で、あまり怖さがわかっていなかったけど、今日そなえ館に来て、たくさんの方が頑張っていたことがわかりました。
- ・小千谷の人たちはとても大変な思いをしたとわかりました。だけど、みんなで協力し合って復興できたんだと思いました。



そなえ館見学の様子

ことから、クラスごとのテーマに沿ったプログラムを考案し、相談しながらサポートをおこなった。

二組のテーマは「小千谷小学校のひみつと小千谷市のそなえ」。小千谷小学校は震災後に建て替えられ、全教室が耐震設計で建設され、体育館は震災時の避難所となることを想定し免震構造となっている。いざという時の「防災拠点」となることが期待され、学校に備蓄されている物資や非常用資機材について、また、小千谷市が実施している緊急告知メール、緊急防災ラジオについて自分たちで調べた。

九月に「各クラスに対して語り部の紹介や資料提供などのサポートをしてほしい」との要望があった。各クラスがそれぞれテーマを掲げ防災学習を進めていた



発表会の様子

# おぢや震災ミュージアムそなえ館の防災教育支援実践例

## 学校が設定した授業の目標

中越地震について調べることを通して、中越地震に対する知識を深め、復旧・復興に尽力した人々の思いを知る。そして、これから起こりうる自然災害に対しての普段からの備えを意識し、自分たちにできることは何か考えることができる。

## 学校が設定した期待する子ども達の姿

- 中越地震について関心を持ち、資料を活用したり、聞き取り調査をしたりして、自己の課題を追求する。
- 取材の目的を明確にして質問したり、相手の話を聞いたりするなど、節度ある礼儀正しい態度で接する。
- 調べて分かったことや考えたことを仲間と話し合い、比較したり関連づけたり、意味づけたりして自分の考えをまとめる。
- 目的意識を明確に持ち、相手に応じた表現方法を工夫して、仲間と協力し学びの成果を発信する。
- 取材、現地調査、インターネットなど、多様な方法を用いて自分の課題を解決する。

▼1組、3組、4組、5組に行った、防災教育支援は下記の通り。

### 1組：「地震発生時から三日目までを様々な視点から学ぶ」

#### ○要望

「震災時からの様々な事象の事実、体験者の思いをまとめ、児童が自分たちの思いを表現できるよう支援してほしい」

#### ○サポート内容

大きな災害が発生した時にはどのようなことが起こるのか、地震発生から3日目までの記憶と記録を伝えるために、自らの体験談や事前にもらった児童の質問事項に応える形式でそなえ館スタッフが出前授業を2限分実施した。

#### ★子どもたちへ伝えたいこと

- ・災害時は普段からやっていることしかできない、学校での避難訓練を真剣にやしてほしい。
- ・自分の命は自分自身で守る。そのためにはどのような行動をとったらよいを学んでほしい。
- ・避難生活は隣近所の人たちと協力することが大切だということを学んでほしい。

#### ★子どもたちの発表から

- ・今、わたしたちにできることは、中越地震という悲しい出来事があったこと、そこから立ち上がって今の小千谷をよみがえらせた人々の知恵や絆があったこと、そこには多くの人々の支えがあったことを、これから多くの人に伝えていくこと。

### 3組：「公助から学んだこと～地域のために～」

#### ○要望

「子どもたちには想像できない災害時の様々な仕事を、具体的な項目をあげてお話いただき、災害時の大変さを伝えてほしい」

#### ○サポート内容

災害対応や生活支援、災害復旧にはさまざまな人・組織が関わっていること、多くの苦労があったことを伝えるため、当時の行政職員や地域の防災会長など、地域のために活動した三人の地元語り部を紹介、講話していただいた。

#### ★語り部からのメッセージ

- ・日頃から隣近所の人との付き合いをしてほしい。
- ・地域だけでなく、家庭でも食料の備蓄をしてほしい。
- ・災害で命を失くさないため、自分の命は自分で責任を持つことが大切。

#### ★子どもたちの発表から

他の人を助けるためにもまずは自分の命を守るためのそなえが必要なこと、近所の人とは顔見知りになっておくこと、自分にできることは小さなことでも行動に移すこと、人のためを思って行動すること、これらひとつひとつの行動が自分と誰かを助けることにつながっている。

### 5組：「普段からのそなえについて」

#### ○要望

「普段のそなえには何が必要か考えることができるようなプログラムを2回に分けて実施してほしい」

#### ○サポート内容

災害時に必要な“モノ”のそなえ、“こころ”のそなえについて、スタッフが出前授業でプチワークショップを実施。授業を実施するにあたり、事前に「震災後、そなえたもの」を家族にインタビューしてもらった。

#### ★プチワークショップ

第1回「そなえランキングをつくろう！」【必要な「もの」のそなえ】  
・グループに分かれ事前インタビューの内容を発表。震災後にそなえたもので特に多かった3つをピックアップし、ランキングにまとめてもらった。

第2回「参加している地域の行事は？」【必要な「こころ」のそなえ】  
・こころのそなえとは「挨拶」や「顔を覚えてもらうこと」。このことをふまえて「地域の大人と顔をあわせる行事」にはどのようなものがあるかグループに分かれて考え、発表してもらった。

#### ★子どもたちの発表から

・備蓄品はただそなえるだけでなく本当に役立つか試してみること、地域の人に挨拶をすることでいざという時に頼れる人が増えること、地域の行事に進んで参加することで絆が深まり協力するという意識作りができる、また子どもたちも「地域の一員」であることを感じることができる。普段からモノと心、両方のそなえをしておくことが大切。

### 4組：「地震発生3日後から避難所生活の様子について」

#### ○要望

「避難所や仮設住宅での生活について実際の体験者から生の声を聞き、当時の様子や苦労したことを教えてほしい」

#### ○サポート内容

避難所生活を通じて、当時の苦労や多くのあたたかい支援をいただいたことなど伝えるために、特に被害が大きかった地域で当時区長を務めていた方など、地元の語り部さんを手配し、講話していただいた。

#### ★語り部からのメッセージ

- ・普段あたりまえに使っているものがすべて使えなくなる。みんなで力を合わせることを学んでほしい。
- ・大切なことは協力し合い、わがままを我慢する心を持つこと。
- ・人の命が一番大切。大きな災害のあとすぐには支援がこない。最低三日間は自分で生き抜くことをおぼえてほしい。

#### ★子どもたちの発表から

・命が何よりも大切だということ、つらい時こそ助け合いと協力、絆で乗り越えていくこと、そのためには日頃から地域の人たちとの絆を強いものにし、何があってもみんなで乗り越えていく気持ちを忘れずに過ごしていきたい。

### 5年生総合発表会を見て

防災をテーマにした学習の進め方について担任の先生から相談を受けたのは、夏休みの終わりごろだったでしょうか。熱心な先生方に、的確なアドバイスができたかどうか半信半疑でしたが、この発表会を見て、私の心配は杞憂であったことがわかりました。

クラスごとにテーマを設け、調べ学習を行い、自分たちにできることを考えた素晴らしい発表内容でした。子どもたち全員が、小千谷をととても大切に思っていることに、とても感動いたしました。

「防災」と一口に言っても、とても奥の深いものです。子どもたちにとって、これがゴールではなく、ぜひ家庭や地域に一步ふみ出すスタートとなるよう、この学習プログラムが持続的な取組みなることを願っています。できれば、毎年見に行きたいと思います。

(地域防災力センター 関谷央子)

※地域防災力センター、中越メモリアル回廊各施設では防災教育支援を行っています！お気軽にお問い合わせください。

# 人

## 第1回

ないとう かずあき  
内藤 和明

長岡市川口生まれ

父の跡を継ぎ、電気工事・電器店「内藤電気」に勤務。長岡市消防団川口方面隊、障がい者支援「ぶれジョブ長岡かわぐち」でも活動し、昨年まで川口町商工会青年部に所属する等、地元にしっかりと根を張り様々な分野で活躍。バンド『M'z』として音楽ボランティアも行う。



―中越地震発生時はどのような状況でしたか

自宅に居て、もうすぐ夕飯が出来るところだった。地震の二週間くらい前から胸騒ぎがして落ち着かず、たんすの上に大きな荷物が置いてあるのを見て、何故だか「もし地震がきたら危ない」と感じ位置を動かしたりしていた。そんな風に思っていたので、本当に地震が起こった時にすぐ避難の姿勢を取ることが出来たように思う。幸い家族にけがは無く、家も倒壊せず、被災直後は車内で寝泊まりをしたが、その後は自宅で避難生活を送った。ただ、昔から強いイメージしかなかった父が地震直後に倒れ、日赤病院に緊急搬送されてしまった。病院に先まわりして、救急車で運ばれてくるであろう父を待っていた。担架で運ばれ、生死の境を彷徨っている弱々しい父の姿を目の当たりにして、無意識に「親父」と大きな声で叫んでいた。母は入院する父を看病するため、まだ五ヶ月に満たなかった娘も居たため、妻子は長岡市内に行ってもいい、自宅には自分だけが残った。

―消防団員としては、どのような活動をされたのですか

消防団の対応本部が川口支所（当時川口町役場）の前に出来て、そこから各分団に分かれ活動した。自分は高速道路の越後川口インターに降ろされる救援物資を避難所へ運搬したり、行方不明者が多く出たのでそういった方の捜索、ガソリンを扱う給油所の警備などをした。国道が寸断されていたので、その間国道の脇に車を止め寝泊まりをされていた被災者の方も居た。道が復旧されることになり、移動してもらおう為に声掛けをする任務も任せられた。とても申し訳なく、心苦しかった。あの時、誰もが心に余裕が無かった。地震後にプレハブ小屋などがたくさん建った為、新しく電気配線が必要になり昼間は本業の電気工事を、仕事が終われば消防団の任務に向かった。自衛隊の皆さんが作ってくれた仮設風呂が川辺にあったが、家に帰った後疲れ果て、お風呂に入る気になれなかった。一人で家に居たので、屋外で避難生活をしている方は寒い思いをしていると思います、自宅の布団や洋服などを渡したりした。

―大変な経験をされたのですね

でも、あの経験で防災意識が芽生えた。中越地震後も、川口で水害が起こり消防団員として復旧作業にあたったが、地震の時に対応した経験が生きていると感じる。地震がきっかけで、父の弱い面、母の強い面を知った。頼りなく見えた弟が、私達の代わりに避難所の仕事をしてくれた。妻と子ども達に早く会いたいという気持ちで、私を前へ前へと突き動かしてくれた。自分が何を守るために生まれてきたのかを知った。地震前まで別々に暮らしていた両親達とは一緒に住むことになり、今では子どもの世話をしてくれたりしている。家族の大切さを、以前よりずっと強く感じるようになった。

―音楽ボランティアは、どのようなきっかけで始めたのですか

最初は、小千谷市の合唱団で会ったピアニストの方と「何か面白いことをしたい！」と五年前に意



きずな館にてぶれジョブサポーター活動

中越地震当時旧川口橋の警備



川口夏祭り 第1回えちご川口水合戦



中越地震当時 対策本部テント前(現川口支所前)

第1回えちご川口水合戦優勝

—今後の展望を教えてください—

地元で生活していて様々な役目や仕事もあるけど、自分が楽しんでやるのが一番。それは周りにも伝わると思う。やるからには楽しくやろう、というスタンスでやってきたのが今に繋がっていると思う。そして、ぶれジョブなど新しい物事を周りに勧めたいと思った時、自分が地元の組織に入っていた事はとても後押しになったと感じる。

今回の取材を通じて家族の大切さ、今までも今も、これから先も、ずっと家族を支え、そして支えられて生きていくのだということ、震災から十年が経ったが改めて思い返すことができた。現在では家族も増えた。これからも家族で力を合わせて生きていこうと思う。

—ぶれジョブ長岡かわぐちとはどのように関わるようになったのですか—

一昨年の秋に初めて川口でぶれジョブについての勉強会があり、そこに参加してから。ぶれジョブは、障害のある子ども達が地域で企業・ジョブサポーター等の協力を得て、支援の必要な子どもたちを地域の中で育て、誰もが暮らしやすい地域社会をつくるのが目的。子ども達の放課後や土日に週一回程度の職場体験(プレジョブ)を行うもの。当時私はPTA会長として勉強会に呼ばれた。保護者さんと色々話していく中で、これはやっていかなければと思った。気が付くと、スイッチが入ったように学校関係や商工会の理事会に説明・宣伝をしに行っていた。自分もサポーターとして、職業体験をするお子さんを見守って、一緒に作業をしたりした。最初に東川口の割烹美よしさんと、次に川口きずな館でぶれジョブを行うA君のサポーターに入った。一番嬉しかったのは、きずな館と一緒にテラスの掃除をしていた時、「お名前を教えてください」とA君が言ってくれたこと。それまでずっと一緒に作業をしてきたのに今頃?と思うかもしれないけど、A君が他の人を名前前で呼んでいるのを見たことがなかった。ウルトラマンが好きとか、こういう映画が好きとか、私と話をする中で少しずつ打ち解けて、やっと心を開いてくれたのかな、と思った瞬間だった。そうしてから、話が弾んで止まらなくなることもあった。とても嬉しかった。こういう活動に参加しないとわからなかった世界だと思った。

気投合したのがきっかけ。その後、小千谷の障がい者支援センターひかり工房さんで、当時復興支援員をしていた渡邊智行さんと出会い、彼がギターを担当し、私がボーカル担当として二人でバンドを組むようになった。東山地区の公民館を借りて練習をして、ひかり工房さんで初めてB♭の曲を演奏した時は緊張した。小心者で、前日眠れなくなったりした。でも当日はすごく盛り上がり、本当にお客さんが喜んでくれた。ライブで一緒に曲にのって、みんなと一体になる感覚が素晴らしい。ファンレターや絵をもらったり、各々の得意な表現の仕方でも「楽しかった」事を表現してくれた物をいただいて。それから、年四回のペースでひかり工房さんでライブをさせてもらっている。他にも、昨年の十二月には川口運動公園の体育館で練習して、交流体験館「杜のかたらい」でのコンサートに参加したりした。

【新人職員をご紹介します】

2015年4月より、3名の新人職員が加入しました。



井上 賢太郎 (いのうえ けんたろう)  
地域防災力センター コーディネーター  
ひとこと：長岡の乙吉町に住んでいます。趣味は空手と猫と遊ぶことです。



中村 充 (なかむら みつる)  
川口きずな館 コーディネーター  
ひとこと：小千谷出身の23歳です。お酒が好きです。よろしくお願ひします。



関 将慶 (せき まさよし)  
やまこし復興交流館おらたる スタッフ  
ひとこと：山古志の梶金集落出身です。中越地震の時は小学校3年生でした。

【2つの賞を受賞しました！】

3月14日～18日に宮城県仙台市で開催された、第3回国連世界防災会議にて、中越市民防災安全大学ならびに中越市民防災安全士の取組みが「ジャパン・レジリエンス・アワード(強靱化対象)2015」の優秀賞を受賞いたしました。

また、平成22年度より、長岡市や長岡市社会福祉協議会、NPO団体などと協働・連携して災害ボランティアセンターを設置・運営している「長岡協働型ボランティアセンター」が「第19回防災まちづくり大賞」の消防庁長官賞を受賞いたしました。次号では、この取組みについて、特集を組んでご紹介します。



「中越メモリアル回廊全体図」

2015年11月  
開館予定

中越沖地震のメモリアル施設  
柏崎震災アーカイブセンター  
(仮称)



旧公会堂の喬柏園(きょうはくえん)に市民活動センターと併せて整備され、地震の経験・教訓とともに、賑わいの再生に取り組み復興の町づくりを伝えます。



会員募集中!

当機構では、地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援して下さる会員の方を募集しています。皆様のご入会をお待ちしています。

参加資格：当機構の活動に関心のある18歳以上の方なら、どなたでも参加できます。

会員特典：当機構が主催する研修・講座・イベント等のご案内をいたします。

年会費：正会員 5,000円 個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 100,000円(1口以上)

※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report> 第10号 2015年4月発行

発行人：諸橋和行 編集：関谷央子 日野正基 松井千明 赤塚千明 細貝悠斗 川上沙織

〒940-0062 新潟県長岡市大手通2-6 フェニックス大手イースト2F 長岡震災アーカイブセンター-きおくみらい内

TEL: 0258-39-5525 FAX: 0258-39-5526

E-mail: info@c-bosai-anzen-kikou.jp http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

おらたるの看板娘がおくる  
やまこしの日常4コマ



まんがの作者



やまこし復興交流館  
おらたる スタッフ  
川上 沙織

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター  
きおくみらい

〒940-0062  
新潟県長岡市大手通2-6 2階  
開館時間 平日 10:00～18:00  
土日祝 10:00～17:00  
休館日 毎週火曜日 年末年始  
TEL 0258-39-5525/FAX 39-5526

おぢや震災ミュージアム  
そなえ館

〒947-0026  
新潟県小千谷市上ノ山4-4-2 2階  
開館時間 9:00～17:00  
休館日 毎週水曜日 年末年始  
TEL 0258-89-7480/FAX 89-7485

川口きずな館

〒949-7503  
新潟県長岡市川口中山1441  
開館時間 10:00～17:00  
休館日 毎週火曜日 年末年始  
TEL 0258-89-3620/FAX 89-3621

やまこし復興交流館  
おらたる

〒940-0204  
新潟県長岡市山古志竹沢甲2835  
開館時間 9:00～17:00  
休館日 毎週火曜日 年末年始  
TEL 0258-41-1203/FAX 41-1204